

東急沿線



文・絲山秋子

Akiko ITOYAMA

東京都世田谷区生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、メーカーに勤務。2001年退職。2003年デビュー作『イツ・オンリー・トーク』で第96回文学界新人賞受賞。『袋小路の男』で第30回川端康成文学賞受賞。2005年『海の仙人』で芸術選奨・文部科学大臣新人賞受賞。2006年『沖で待つ』で第134回芥川賞を受賞。近著に『ダーティ・ワーク』（集英社）、『豚キムチにジंकスはるかー絲的炊事記ー』（マガジンハウス）。

<http://www.akiko-itoyama.com>

(写真/時事)

実家は東急田園都市線の用賀駅が最寄り駅である。しかし、当時新玉川線という名で開通したのは小学生の頃なので、その前は東急バスを使って渋谷に出るのが一番楽だった。家は東急ホームの分譲住宅、母について買い物に行くのは渋谷の東横百貨店、父が好きなのは東急ハンズ、子供の頃から東急というのは完全に私の頭に刷り込まれてしまっている。

子供の頃、よくお使いで三軒茶屋の鰻屋に行っていた。愛想のいいおばちゃんに鰻を焼いてもらって、帰りは世田谷線で上町まで乗って、そこから歩いた。なんとなくバスのおいと鰻のにおいが合わない気がしたからだ。鰻を持って世田谷線に乗ると、周りの人が鼻をうごめかすのが面白かった。

その後、就職して全国各地を点々とす

ることになるのだが、病気で退職して東京に戻って来て、最初にアパートを借りたのが蒲田だった。なぜ蒲田を選んだのか、これは直感としか言えないが、一つには東急線が通っているというのが安心感としてあったと思う。

東急蒲田駅はターミナルで、東横線の渋谷駅にそっくり、しかしミニチュアである。なぜミニチュアかと言えば、池上線も多摩川線も三両編成だからだ。世田谷線はまあ、例外として、都内に三両編成の電車が未だに走っているということに最初は驚いた。しかし慣れれば慣れるほど気に入ってしまった。準急も急行もない、すべて各駅停車。電車のスピードも京急などと比べたら随分ゆっくりしている。車内の雰囲気もいい。殺伐として

いない。ここは本当に東京なのか、と思う。外を見れば、線路際の柵に近隣住民が布団を干している。

おおくぼ良太という人の歌で「目蒲線物語」というのがある。リフレインは「あってもなくてもどうでもいい目蒲線」。お父さんは東横線、お母さんは田園都市線（現在の大井町線）、弟が新玉川線（現在の田園都市線）、みんなシルバーの六両編成なのに、目蒲線の「僕」と双子の兄の池上線だけが「草色の醜い三両編成」、「車内にゴキブリホイホイ」が置いてある、「僕たちは捨て子なんだ」という、私は大好きなのだが実にふざけた歌である。今でこそ、多摩川線も池上線も銀色の車両に変わったが、三両編成は相変わらず、この歌を思い出しながら

電車に乗るのが楽しかった。

蒲田の後に住んだのが東急目黒線の西山だった。バス停もなく、蒲田よりずいぶんこぢんまりした駅だが、駅前の庶民的な感じは小田急線や京王線とは違い、やはりどこか、蒲田や三軒茶屋と通ずるものがある。目黒線は元々は目蒲線なのだが、現在は地下鉄南北線、都営三田線直通で、都心に出るのに便利なことこの上ない。もちろん六両編成である。

おかしかったのが、蒲田の人たちは多摩川線のことを「目蒲線」と今でも呼んでいるのに、西山の人たちは絶対に「目蒲線」とは呼ばないことだった。元は同じ沿線だったのに、出世した目黒線と昔ながらの多摩川線の差がなんだか哀しいような、おかしいような感じだった。